〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（13）〉

いずみナーサリーの今までとこれから

中澤智子

桜のつぼみがふくらみ始めた三月のある晴れた日、懐かしい人がナーサリーを訪ねてきました。大学に保育所ができて間もないころ、入園したMちゃんのお母さんでした。

「学位が取れました。もうしばらくは大学に来ることはないと思うので、一度ごあいさつにうかがいたくて。ここがあったから、また勉強しようという最初の一歩が踏み出せました」とお話しくださいました。晴れやかな表情がとても印象的でした。

Mちゃんのお母さんは、別の大学を卒業し、出産後、新聞で大学に保育所ができたことを知り、「これだ！」と思って、いずみ保育所（平成十七年四月よりいずみナーサリーに改称される前の名称）にいらしたそうです。そして研究生として、研究の道を再開されました。

大学に保育施設ができたのは、今から五年前です。開所したばかりのころは、ハード面もソフト面もゼロからの出発でした。子どもたちのお昼寝の時間や、一日の終わりに、保育の話し合いを重ねてきました。保育形態（後述）も普通の保育所とは異なる中、〝いずみらしさっ

て何だろう？　いずみで大切にしたいことは？〟ということを、一からつくっていく過程でした。

このような途上段階の中、Mちゃんのお母さんは新聞でいずみに出会い、Mちゃんは保育所生活が始まり、お母さんもまた新しい生活が始まったのでした。ナーサリーもMちゃんもお母さんもみんな〝一年生〟だったわけです。Mちゃんは途中で居住区の認可保育園に入ることができたので、実際のおつき合いは、一年少しでした。いずみナーサリーを卒所して二年が過ぎ、このような機会に足を運んでくださったことをとてもうれしく思うと同時に、大学の中にあるいずみナーサリーの存在意義について、今一度見つめ直し、原点に立ち戻るべく身の引き締まる思いがしました。

「大学に保育所設置を！」という要望は随分前からあったそうです。

今の日本の保育事情では待機児童がとても多く、地域によっては、フルタイムの常勤でも認可保育所に入れないところもあります。そのような中で、学生や助手、非常勤講師などの身分では認可保育所に入所することはとても難しく、子どもの預け先を確保することは大変なことです。子育てをしながら研究を続けたい、もう一度勉強したいというお母さんの強い思いと、真摯な夢の実現と後続の女性研究者の育成を支援しようという大学の先生方の思いが重なり、検討に検討を重ねて、大学内保育施設が誕生しました。多くの方の思い、願いと熱意・尽力の下にできた保育施設であること、そしてその方々の思いも背負っているということを心の片隅に置いておきたいと思います。

このような経緯で誕生した保育施設なので、利用方法も、一般の保育所とは異なります。母親の授業や研究・働き方に合わせ、週一日～週五日で選択できます（学外者は週三日以上の月極コースのみ）。フレキシブルな保育形態と言えば聞こえはよいですが、これは裏を返せば、

毎日集う子どもが違う中で、保育が展開していきます。

たとえば、週三日利用の子ども同士の場合、週に一回しかお互いに会えないこともありますし、毎日朝八時半から十七時半までの子どももいれば、遠方からの通園で、片道二時間弱かかるため十時三十分ごろから十五時まで週一～二回通うのが精一杯という家庭もあります。週一回というのは、子どもにとって「安心できる場」となるまで時間がかかることもよくあります。

以前は、毎日登園する子どものメンバーが決まっていて、遅くとも十時ごろにはみんなそろっていれば…と思ったこともありました。しかし、母親自身のライフスタイルの中に、どのようなバランスで育児と研究・仕事を組み込んでいくかは、それぞれの事情によって異なります。

子どもが生まれると、それまでの生活は一変します。自己実現したい・よき母でありたいという両方の思いにかられ、「私はこういうスタンスでいく！」とすっぱり決めて一直線に進めていける方もありますが、大半の方は、「これでよいのだろうか？」と悩んだり、立ち止まったりするのではないでしょうか。

そんなとき、模索しながら、自分の歩く道を決めて進んでいくための最初の一歩を踏み出すには、週一～二回利用という小さなステップは必要なのかなとこのごろ思います。「最初から毎日預けるのはちょっと…一緒に過ごせるときは過ごしたい」「子どもの様子を見ながら少しずつ研究の比重を大きくしていきたい」など、それぞれの子育て観を受け入れられるようにし、長く続く子育ての最初の時期に、アクセル全開ではなく、様子を見ながら母親と子どもにとってのよりよい在り方を、お母さん自身がその時の自分なりの答えとして見つけていけたらよいなと思っています。

選択肢はたくさんあります。何を第一とするのか、何を優先するのか、物理的な面、精神的な面の両方あります。何が一番よいのか、正しいのか、そんな答えはありません。お母さん自身が決めたことの中で、最善のことができればよいのではないでしょうか。

いずみナーサリーは、お母さんにとって、共に子どもの成長を喜んだり、悩んだり考えたりできる伴走者であり、「あのとき、思い切って預けてよかった」「ここなら安心して子どもを預けられる」と思ってもらえるような場所でありたいと願っています。

私も、〈安心して預けられる〉＝〈子どもが楽しく豊かに過ごせる〉ことだと思います。時に、親にとっての〈よい保育〉と子どもにとっての〈よい保育〉は、違うことがありますが、どちらか一方だけに傾いたものであってはならないと私は考えます。

預けるお母さんの視点から、いずみナーサリーについて述べましたが、ここで過ごす子どもたちにとって、いずみナーサリーはどうあるべきか、どのような保育を大切にしてきたかも少し書きたいと思います。

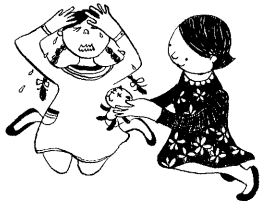
先述のとおり、フレキシブルな保育形態をとっているため、朝登園する時間も違えば、前回登園した日も違う、随時受け入れるため、入園時期もそれぞれです。ここで二つの事例を紹介します。

A君とB君は同じ三月生まれの二歳児です。利用日の関係で週に一回しか会えません。あまり接触がなく、お互いに意識をしていないように見えていたのですが、八月のある日、A君が大好きなお友達が皆お休みで、二歳児はA君とB君だけでした。二人は黙々とプールの中でそれぞれ別の遊びをしていましたが、保育士がA君の脇を持って大胆に「ユーラユーラ」と水の中で揺さぶると大喜び。B君も「僕も！」とばかりに手を広げ、順番に揺さぶり遊びをして、キャーキャー大騒ぎでした。その日の昼食前、手洗い室で二人ニコニコと顔を見合わせ、二人の距離がぐっと縮まった日でした。

楽しさは伝染します。それぞれの「楽しかった！」という気持ちが二人の気持ちをつないだように思えました。一緒に遊んでいるように見えなくても、お互いに意識しながら、気持ちの上では〝一緒〟ということがよくあります。粘土をしているときに、チラッと横を見て同

じようにしてみようとする子、その日は気にも留めていないそぶりで、次のときにやってみる子、とそれぞれの個性が出ておもしろいです。

週に三回来ているCちゃん（一歳児）は、一時期、朝お母さんと離れ難く、お友達との間でもおもちゃの取り合いなどでぶつかることがよくありました。そんな日、一時預かりのDちゃんが泣いているのを見て、「ママ（がいなくて寂しいのかな）？」と心配し、おもちゃをどうぞと手渡しました。ママ恋しくて泣いている新しいお友達を思いやってのことでしょうか。月極利用の子ども同士では、けんかも取り合いもよくありますが、新入りや自分より明らかに小さい（皆、充分小さいですが）赤ちゃんには寛容な子どもたち。それは毎日会わなくても、〝仲間〟として意識し、お互いを認めているからではないでしょうか。



いずみナーサリーでは一時預かり保育も実施しています。一時預かりだからといって、必要な時間だけ〝ただ預かる〟のではなく、ナーサリーにいる時間が、その子どもにとって少しでも豊かなものであるように、月極利用の子どもと分けて保育するのではなく、お互いにとって新しい出会いとなるようにとの思いをもって、できる限り同じように過ごしています。その日その日が新しく、かけがえのない一日です。

朝、今日のメンバーを確認し、「二歳児は今日の出足が遅そうだね。〇歳児は九時半にそろうから先にお散歩行きます。一歳のEちゃんは八時半から来ているから〇歳児さんと一緒にお外行く？」「きょうは感触遊びの好きな子が多いから指絵の具にしようか。FちゃんとGちゃんは直接指に付くのが苦手だから、筆とスタンプ、それから手を洗いながらまた遊べるように水の入ったバケツを用意しよう」など、それぞれのクラス担任が話し合い、子ども一人ひとりに合った参加の仕方ができるようにしています。そして子どもたちのお昼寝時、ミー

ティングで午前中の保育について語り合い、次に活かせるようにします。

誰もが遊びの主人公であり、いろいろな物語が生まれます。環境もひっくるめて子ども一人では生まれることのない、子ども同士の影響力というか、響き合い・育ち合いがそこにはあります。このように、いずみナーサリーでは〝個〟を大切にしながら、定員十八名という小規模な集団であるよさを活かす保育を、日々考えながら実践しています。

そして、実践に欠かせないのは省察です。一日の終わりに、保育と離れた場所で、その日の保育を振り返ります。「本当はこういうことを伝えたかったんじゃないかな。あのとき、こうしていれば、Aちゃんはどうしただろう?」

子どもの心の中は、あくまで大人から見たとらえ方です。本当のところは当の本人しかわかりません。でも、少しでも子どもの心に近づきたいと思います。

「ヒューマンケアの仕事をする人は一生学び続けなければならない。学ぶ気力がなくなったとき、その場を去らなければならない」と、ある研修で聞きました。どんな仕事でも学び続けることは必要です。でも、保育士という仕事はこれが正解というものは一つとしてありません。答えは一つではなく、関係の中にあるものだと、このごろ思います。

親―子、保育士―子、親―保育士、子―子、親―親、保育士―保育士など、二者関係だったり、三者関係だったり、いろいろな関係がナーサリーの中では存在します。どれが一番大事というものはありません。それぞれが自分の人生の主人公です。一人ひとりが大切にされる関係性の中で、子どもも輝き、大人も輝く場を目指し、一日いちにちを大切に、一歩ずつ積み重ねていきたいと思っています。

（いずみナーサリー）